



Title	逆接関係を表す接続表現に関する日中対照研究：接続助詞「けれども」「のに」「ても」と中国語の逆接表現の比較を中心に
Author(s)	王, 天保
Citation	大阪大学, 2011, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59141
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed >大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

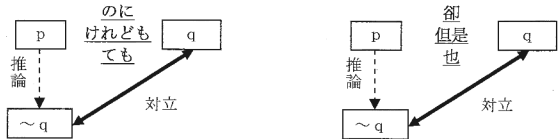
The University of Osaka

論文内容の要旨

本論文は、対照研究の立場から日本語と中国語の逆接関係を表す接続表現について考察を行ったものである。具体的に、日本語の接続助詞「けれども」「のに」「ても」及び中国語の逆接関係を表す「但是」「卻」「也」などの表現を対象とし、接続表現の推論、文末モダリティとの共起関係、複文の従属度など視点から、それらの表現の意味用法を比較しながら、両言語の相違点と対応関係を明らかにすることを目指している。本論文は7章から構成されており、各章で扱った内容は次のとおりである。

第1章では、日中両言語の逆接に関する定義及び逆接複文の分類について概観する。次に先行研究を整理し、問題点を指摘すると同時に、本論文の位置付けを示す。

第2章では、逆接複文が含意する推論と、複文の前・後件の従属度を通じて、日本語の「けれども」「のに」「ても」と中国語の「但是」「卻」「也」を考察する。逆接接続表現に関する従来の研究では、複文の前・後件の関係を論じるものがよく見られる(板原(1985),渡部(1995),家田(2004),前田(2009))。しかしそれらの記述では逆接表現が我々の認知とどう関連するのかは、はっきり示されていない。本論文は逆接という表現は極めて認知的であると主張し、「可能な推論」と「必然的な推論」という概念を用いて、各接続表現が表す、前件と後件の関係や認知プロセスの相違について論ずる。



日本語の「けれども」と中国語の「但是」は「pだから¬q」という話者が考えた成立可能な推論が後件と対立することを表すが、「けれども」と「但是」を使う場合、話者にとって、「pだから¬q」が成立しない可能性は排除されていない。そのため、可能性を持つ推論が後件と対立しても、話者はその対立に対する心構えはすでに出来ているため、意外という気持ちは生じないと考えられる。また推論成立の可能性が減っていくにつれ、「けれども」は逆接の用法から、「対比」「並列」「前置き」などの用法へ拡張していくと考えられる。

一方、日本語の「のに」と中国語の「卻」は「pだから¬q」という話者にとって必然的に成立する推論が後件と対立することを表す。「のに」と「卻」が用いられる場合、話者の認知にある「pだから¬q」は必然的なものである、その必然的なものと後件が対立すると、意外、不満などの気持ちが生じやすい。また「のに」と「卻」を用いる複文の前件は後件に強く従属しているため、複文全体は強い緊密性を持っている。そのため、前件は後件のモダリティ表現を共有する場合もあり、後件でのモダリティの使用制限は厳しい。これについて、実際の調査でも「卻」は「のに」と同じく、後件でのモダリティ表現の使用が難しいことが確認されている。

日本語の「ても」と中国語の「也」は二通りの意味を表す。一つは「¬pならばq」と「pでもq」との対比、つまり逆接である。もう一つは「rならばq」と「pでもq」との対比である。また「ても」と中国語の「也」を使う場合、複数の推論が容認される特徴があり、「複数条件」、「不定語との共起」などの用法にも「ても」と「也」が使用できる。ところで、「ても」と「也」は従属度が高いが、後件でのモダリティの制限が「のに」より緩い。その理由として「ても」は必然的な推論を含意しないから、ということが考えられる。

また、以上のような逆接接続表現の意味分析のみならず、2章の後半では構文形態の考察から逆接関係を表す接続表現の従属度の異同についても考察をくわえる。その分析に基づき、先行研究が示唆する、複文の従属度と複文の前・後件の関係がどう関連するかについて論じる。推論、複文の従属度、文末モダリティとの共起関係、などの視点から考察した結果より、「けれども」「のに」「ても」と中国語の「但是」「卻」「也」は非常に高い類似性を持つことがわかる。

第3章から第5章にかけては、コーパスを用いて、「けれども」「のに」「ても」対応する中国語の表現を観察し、それぞれの対応関係を明らかにする。その結果から以下の相違が観察できる。

「けれども」は逆接の意が強い文脈でも、逆接の意が弱い文脈でも使われる。これに対して、中国語の場合、逆接が強い文脈では「但是」が適切であるが、逆接の意が弱い文では「不過」「只是」などの接続表現が頻繁に使われる。

「のに」に相当する中国語の表現について、日本語の原文が説明文の場合、感情の表出が弱まり、複文間の関係を説くことに重点が置かれ、接続詞「但是」などが対応する場合が多い。これに対して、原文において感情的意味が強い場合、「卻」などの副詞が使用される。また、副詞の使用は原文の意味に関連するだけでなく、構文形式にも関

【4】

氏名	王 天 保 (Wang, Tien-Pao)
博士の専攻分野の名称	博 士 (言語文化学)
学 位 記 番 号	第 2 4 8 5 0 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 23 年 6 月 30 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学 位 論 文 名	逆接関係を表す接続表現に関する日中対照研究－接続助詞「けれども」「のに」「ても」と中国語の逆接表現の比較を中心に－
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 春 木 仁 孝 (副査) 教 授 木 内 良 行 准教授 渡 邊 伸 治

る。「のに」文全体が連体修飾、引用節に収まる場合、中国語の訳文も同じの形を取るならば、接続詞は使えず、副詞の使用が適格であることが観察される。

「ても」に対応する中国語の表現では、最も使用頻度が高いのが「也」と「即使...也」である。原文では「ても」が「何」や「どこ」などの不定語と共に起する場合、その中国語訳では「不管」「都」「不管...都」などの表現が見られる。さらに複数条件を表す「ても」は中国語の「也好...也好...也」「也好...也好...還」「也好...也好...都」などの表現に対応する。

また、「けれども」が表す「対比」「並列」「前置き」の用法と「のに」が表す「非従属的用法」では、前件と後件の対立関係は読み取りにくい。ため、接続表現を使用しない方が自然だと考えられる。さらに、「ても」が表す「並列」の用法は中国語の接続表現を用いないパターンに対応しやすいという傾向も観察される。

日中対応関係から見ると、「けれども」が「但是」、「のに」が「卻」というようにきれいに対応するのではなく、「のに」が「但是」、「けれども」が「卻」という逆の対応関係もある。しかし、このような逆の対応関係は原文の意味、構文形態に強く関連している。

さらに、これまで中国語では接続表現の使用、不使用は極めて自由であるとよく言われていた。しかし本論文の調査結果から、中国語の逆接複文において、接続表現を使用する例は接続表現を使用しない例より多いとわかる。これは水野(1985)の結論に合致している。また接続表現の使用に関して規則があり、これも原文に強く関連している。原文で「けれども」「のに」「ても」が逆接を表す場合、その中国語訳では接続表現の使用が多く見られる。接続表現の不使用の例では対比表現の形を取るものや、構文形態を変えたものがよく観察されている。そのため、中国語では接続表現の使用は自由であるというより、一定の条件を満たさないかぎり、接続表現の使用が必要だと考えられる。

第6章では、まず「けれども」と「のに」における接続助詞から言いさしの用法へ派生していくプロセスを明らかにする。次に言いさしの「けれども」「のに」と中国語の対応関係はどのようなものかについて考察する。本論文では「けれども」「のに」節で言い終わる文を、後件を補うと逆接に復元できる言いさしⅠと、後件に言い残しがない言いさしⅡに二分する。そして「けれども」は言いさしⅠ及び言いさしⅡの用法を持つのに対し、「のに」は言いさしⅠの用法しか持っていないと考える。本論文では言いさしⅠと言いさしⅡの「けれども」は接続助詞の「けれども」に由来すると主張し、それらの用法の拡張のルートを明らかにし、各用法の間の連続性を示す。一方、「のに」は言いさしⅡの用法を持たず、言いさしⅠの用法は逆接接続助詞「のに」の後件が省略されたものだと考えられる。また、「けれども」と「のに」が表す言いさしⅠ用法と中国語の対応関係について、先行研究では言いさしの「けれども」と「のに」は中国語の接続表現に対応しにくいと言われている。実際の調査では対応数は決して多くはないが、言いさしⅠを表す「けれども」と「のに」は中国語の接続表現「不過」「可是」「然而」に対応する例がある。決して「けれども」と「のに」が表す全ての言いさしⅠ用法は中国語に対応しないというわけではない。

第7章では、各章の結果をまとめ、本論文の結論を述べる。従来の研究では、常に接続助詞の用法、或は対訳関係から「けれども」は「但是」、「のに」は「卻」、「ても」は「也」に対応するという結論だけ述べられているが、なぜそれらの表現は高い対応度を持つのかについて説明されていない。本論文では単に用法の対応関係だけではなく、推論及び複文の従属度の類似性を考察することにより、その対応関係を成立させている理由を明示する。

論文審査の結果の要旨

王天保君の『逆接関係を表す接続表現に関する日中対照研究』は、日本語の「けれども」「のに」「ても」とそれらに対応する中国語の逆接表現について考察したものである。

本論文では、接続表現が含意する推論と実際の落差を表す逆接表現について、それぞれの逆接表現が使われるときの推論の違いに基づいて様々な用法を記述分析しているが、試問においてはキー概念となっている、推論の性質を表す「可能性」、「必然性」、「期待」などがそれぞれどのように違うのか、この三つの性質は結局、一つの概念で捉えることができるのではないかという指摘があった。また、「pならばqである」という推論の成立する可能性を高から低へとスカラーで表しているが、その際それぞれの推論の成立の可能性の高低は何に基づいているのか、百科辞典的な知識に基づいているように見える場合でも、結局は認知者・発話者がその可能性をどのように捉えるかによるのではないかという指摘もあった。この点についてはそれぞれの逆接表現と、客観的・主観的という性格付けとも関連して今後さらに検討を要する問題であると思われる。

中国語では日本語に比べると接続表現を用いない場合が多いと一般に言われるが、逆接表現に関しては一定の条件がないと接続表現を使わない接続は可能ではないという筆者の指摘は重要であるが、これは逆接表現の時だけのことなのか、接続表現一般についてはどうなのかという点についても今後考察を期待したい。

日中の対照研究としては、それぞれの表現の逆接から拡張された用法にまで踏み込んで、広く対応関係について考察しており、印象的な対照研究が多い中ではその点は高く評価出来る。

ただ、特に日本語の逆接表現が対比や並列、例示、前置きなどの用法にまで拡張している意味的な基盤や、逆接表現の本質とは何かといったことにまで踏み込んで考察していれば、さらに論文の内容が豊かなものになったのではないかと思われるが、この論文が逆接表現の日中対照研究として当該分野に大きく貢献したことは変わりはない。

以上のようにこの論文は博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。